

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 26 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370794

研究課題名(和文)近世初期讃岐国における城下町建設と開発・治水に関する研究

研究課題名(英文)A study on the constructions of castle towns ,the development and the renovations of rivers in the beginning of the Early-modern times Sanuki

研究代表者

田中 健二(TANAKA, kenji)

香川大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：30128045

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、各種の讃岐国絵図及び城下絵図、近世の歴史書・地誌類を主な資料として、近世初期の讃岐国においての、大名による城下町建設、河川の改修、ため池の修復・新造について考察することにより、国土開発がいかに進められたか、について明らかにした。

主な成果としては、讃岐国が生駒家の支配下にあった寛永年間と、高松松平藩初代藩主・頼重の治世下の万治～寛文年間の2期に開発の画期があること、第1期においては自然との調和がはかられていたが、第2期においては乱開発に近い状況がみられること、各種の讃岐国絵図及び城下絵図などの絵画資料の史料としての有効性が検証されたこと、などがあげられる。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the course of national land development by examining the constructions of castle towns, the renovations of rivers promoted by Daimyos in the beginning of the Early-modern times with various kinds of Sanuki kuni-ezu, jouka-ezu, and historical books and documents of the Early-modern times as the main source. The major achievements are as follows: 1. There are two epochs of development; the first epoch is during the Kanei era (1624-44) that the Sanuki Province was under the control of the Ikoma clan and the second epoch is during the Manji era and the Kanbun era (1658-73) under the reign of Matsudaira Yorishige, the first Lord of the Takamatsu Domain. 2. Although harmony with nature was maintained in the first epoch, there were situation close to wanton development in the second epoch. 3. The effectiveness of pictorial materials such as various kinds of Sanuki kuni-ezu and jouka-ezu as a historical material was verified.

研究分野：日本史

キーワード：近世 讃岐国 城下町 開発 治水 国絵図 城下絵図

1. 研究開始当初の背景

(1)近世の高松城下町に連なる中世の港町野原については、近年、発掘調査と文献調査が進み、見るべき成果が得られている。平成19年(2007)に開催された香川県歴史博物館(現・香川県立ミュージアム)で開催された特別展「海に開かれた都市 高松 - 港湾都市900年のあゆみ」はその大きな成果である。図録に収められた市村高男「中世讃岐の港町と瀬戸内海海運 - 近世都市高松を生み出した条件」では、中世の港湾都市としての野原の姿および東方に広がる古・高松湾が復元されている。

研究代表者も、以前から本研究についての準備を進めていたが、上記の研究に触発され、平成20年3月、研究論文「生駒時代・高松城下周辺の地形について」(『香川県立文書館紀要』第12号 1頁-28頁)を発表した。同論文では、文献史学、自然地理学、考古学の成果を活用して当該期の城下周辺の地形について復元を試みた。とくに城下西方の入江については、かなりの内陸部まで湾入していたもので、讃岐一国の大名であった生駒家による河川改修と、その後の高松松平家による街道の建設に伴い陸地化したことを明らかにした。生駒家と松平家による城下周辺地域の開発は、大規模かつ計画的に行われたものといえる。

(2)上記論文と期を一にして、御厨義道の研究論文「高松城における海辺利用の変遷について」(香川県歴史博物館『調査研究報告』第4号 2008年3月)および森下友子の研究論文「江戸時代から明治時代における海岸線の変遷 - 丸亀・宇多津・坂出 - 」(『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第20号 2008年3月)が発表された。

御厨論文は、研究代表者とほぼ同じ史料を用いながら、高松城の整備と城下町の形成過程の究明を試みたもので、生駒家転封後の寛永19年(1642)入部した松平家により高松城は海との関係を深める機構が整備され、「海に開かれた城」として完成したとの重要な指摘がなされた。森下論文では、生駒家築城に係る城郭として高松城と並ぶ規模を持つ丸亀城の城下町について論及し、国立公文書館所蔵の「正保丸亀城絵図」の分析を通して江戸時代初期の様相が描き出された。

(3)翌平成21年3月、高松市歴史資料館が購入した「讃岐国絵図」は、従来知られていなかった新史料であり、研究代表者は、同館の

依頼をうけ鑑定を行った。その結果について要点を述べれば以下のとおりである。

本絵図は、慶長年間(1596~1615)後半における讃岐国の情報が記載されている。

原本ではなく写本であるが、その製作時期は蔵書印から推定して江戸時代前半である。

「讃岐国絵図」としては、従来から知られていた金刀比羅宮所蔵の寛永10年讃岐国絵図より古い情報が記された国絵図の系統に属する。

生駒家により築城された高松・丸亀・引田の3城周辺の地形が詳細に描かれている点で貴重である。

以上のことから、本絵図の発見は、本研究を推進するうえで重要な知見をもたらした。

(4)この間の研究成果については、平成21年10月に開催された平成21年度歴民シンポジウム「- 戦国から太平へ - 戦国武将生駒氏と引田・高松・丸亀の三城」(高松市歴史民俗協会主催、高松市・高松市教育委員会・香川学会後援)の基調講演「生駒氏と開発」において広く一般市民向けに発表した。なお、本シンポジウムの内容については、平成22年3月、同名の冊子(高松市歴史民俗協会編 総頁111頁)にまとめ公刊した。

(5)その後、研究代表者は本研究の主な資料となる各種の讃岐国絵図および城下絵図についての研究をすすめ、次に掲げる論文4編を執筆し発表した。

「続 生駒時代・高松城下周辺の地形について」(『香川県立文書館紀要』第14号 1頁-10頁 2010年3月)

「生駒時代の国絵図に見る讃岐の姿 - 海岸線と国境の峠道を中心に - 」(『香川県立文書館紀要』第16号 1頁-20頁 2012年3月)

「続・生駒時代の国絵図に見る讃岐の姿 - 道と川の変遷を中心に - 」(『香川県立文書館紀要』第17号 1頁-14頁 2013年3月)

「近世初期讃岐国におけるの庄・郷・村について」(『香川県立文書館紀要』第18号 1頁-16頁 2014年3月)

これらの研究を通じて、研究代表者は、本研究課題についての分析視角と解明すべき課題を明確にし、関係資料の分析方法を習得するとともに国絵図・城下図の史的価値についての確信をえた。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、各種の讃岐国絵図および城下図、近世に編纂された歴史書・地誌類をおもな資料として、近世初期の讃岐国においての、大名による城下町建設、新田開発と治水を目的とした河川の改修、利水のためのため池の修復・新造について考察することにより、社会生活の基盤である国土開発がいかに進められたか、また為政者は開発に伴う自然災害の防止にいかに関心したのか、を明らかにすることである。おもな考察の対象とする時期は、讃岐国が生駒家の支配下に入った慶長年間(1596～1615)から松平頼重入国後の万治～寛文年間(1658～73)にかけての間である。この時期は全国的に見ても「大開発の時代」に当たる。

(2)副次的な目的としては、各種の讃岐国絵図および城下図など絵画資料の史料としての有効性の検証が掲げられる。

3. 研究の方法

(1)研究課題に直接かかわる資料である国絵図・城下図の写真の収集と分析を行う。一方で、国絵図・城下図および城下町形成、開発と治水にかかわる図書・論文を収集・読解し、先行研究の理解に努める。

(2)国絵図・城下図については、極力、実見し写真を撮影する。困難な場合は、写真・複写物の提供をうけるか、刊行されている資料集を購入する。

(3)収集した国絵図・城下図の写真・複写物については、必要なかぎり透写図を作成し、読解・分析に当たるとともに、刊行時の判読の便宜を図る。

(4)現地調査および聞き取り調査を行う。とくに河川流路の人為的な変更に関心する。

(5)論文作成に当たっては、国絵図・城下図のほか、土地条件図、米軍撮影空中写真などの図版を多く用いることで視覚的な理解が得られるように留意する。

4. 研究成果

(1)平成26年度

東京大学史料編纂所において、『江戸幕府撰慶長国絵図集成』(柏書房)ほか、刊行された国絵図集成を閲覧し、慶長国絵図・正保国絵図・天保国絵図の必要箇所について撮影を行い、解説の複写を行った。慶長国絵図の中では、徳島大学附属図書館所蔵の「阿波国大絵図」が本研究の課題との関わりにおいて、もっとも利用価値があることを確認した。

香川県内の機関においては、丸亀市立資料館所蔵の「讃岐国絵図」の閲覧・撮影を行った。同館専門職員よりの依頼を受け、各種の絵図について製作時期および相互の関係について意見を述べた。その成果は、平成27年3月同館より刊行された『丸亀市の文化財』第8集(総頁211頁)に生かされた。

香川県高等学校地理歴史公民科研究会歴史部会研究会、坂出市史編さん所、勝賀城跡保存会等の依頼を受け、課題に関わる内容の講演を行い、参加者と意見を交換した。その際の聞き取りにより各地域の用水慣行や戦後の市街地の変化など地元の情報を入手できた。

平成27年3月の研究代表者の定年退職に向け、課題に関わる論文を中心に退職記念誌『彰往考来』(総頁159頁)をまとめ、2月末に刊行した。本誌においては、本年度の研究の成果を生かし、既発表論文の本文・図版の修正等の校訂を行った。第1部「讃岐国絵図」に見る大開発の時代、には、前掲の論文5編「生駒時代・高松城下周辺の地形について」・「続 生駒時代・高松城下周辺の地形について」・「生駒時代の国絵図に見る讃岐の姿 - 海岸線と国境の峠道を中心に - 」・「続 生駒時代の国絵図に見る讃岐の姿 - 道と川の変遷を中心に - 」・「近世初期讃岐国においての庄・郷・村について」他を収めた。

(2)平成27年度

国立公文書館において、二度にわたり、研究課題にかかわる資料の閲覧と撮影を行った。最大の成果は、同館蔵「正保国絵図」写本の閲覧である。本写本は、美濃岩村藩主松平乗命旧蔵本で、讃岐国絵図を含んでいる。本絵図はこれまで、県内外の研究で用いられたことがなく、貴重なものである。なにぶん巨大な絵図であり、写真は必要な箇所での撮影にとどまらざるを得なかったので、『近世絵図地図資料集成 第1期 第16巻正保国絵図・西日本篇』(科学書院)を経費で購入し、従来から知られている讃岐国絵図の諸本との比較検討を開始した。ほかに、高松松平家に関する歴史書の同館蔵「盛衰記」を閲覧し、必要箇所の撮影を行った。

県内の機関においては、香川県立ミュージアム、同文書館、同瀬戸内海歴史民俗資料館及び公益財団法人鎌田共済会郷土博物館において資料調査を行い、撮影した写真をもとに「盛衰記」諸本の校合、同書を批判した

「消暑漫筆」の翻刻と内容の分析を行った。また、県立文書館所蔵の「高松城下図」(仮称)及び鎌田共済会郷土博物館所蔵の「讃岐国高松地図」(摸本)の調査・分析を行い、製作年代を明らかにした。

以上の研究成果については、論文にまとめ、発表するとともに、かがわ長寿大学など一般市民向けの歴史講座で講演を行い、地域へ還元した。論文は、研究協力者の御厨義道と共著の「小神野与兵衛著『盛衰記』と中村十竹著『消暑漫筆』について」(『香川大学教育学部研究報告』)、「香川県立文書館所蔵高松城下図(仮称)の製作年代について」(『香川県立文書館紀要』)、「『讃岐国絵図』に見る『古・坂出湾』の港と浦」(『坂出市史研究』)の3編であり、いずれも課題に直接かかわる内容のものである。とくに県立文書館所蔵の高松城下図については、製作年代が不明であったが、同図から得られる情報をもとに時期を特定した。

(3)平成 28 年度

東京大学史料編纂所・鳴門教育大学附属図書館において、研究をまとめるための参考文献の閲覧・複写を行った。

県内の機関においては、香川県立ミュージアム所蔵の「讃岐国高松地図」の閲覧と写真撮影を行った。

これまでの研究の成果をまとめ、論文「香川県立ミュージアム所蔵元文 5 年(1704)6 月讃岐国高松地図について」と「『正保国絵図』に見る近世初期の引田・高松・丸亀」を発表した。前者においては、公益財団法人鎌田共済会郷土博物館所蔵の模写本「讃岐高松地図」の原本であることを明らかにし、後者においては、国立公文書館所蔵の松平乗命旧蔵「正保国絵図」写本「讃岐国図」を用いて、生駒期の開発の最終的な姿を詳細に明らかにした。また、この間に得られた知見をもとに、以前に発表した論考の内容を改訂して「生駒時代の讃岐国絵図」(『近世初期讃岐国における城下町建設と開発・治水に関する研究』)を執筆した。

従来から担当してきた一般市民向けの講座に加えて、香川県立文書館の古文書解説講座 3 回を担当し、応用編の資料として「『盛衰記』と『消暑漫筆』を読む」を作成し、講座でのテキストとした。本テキストの作成においては、フォトタッチソフトを用いて文字のみを残す手法を用いた。

研究期間の成果をまとめ、平成 29 年 3 月に研究成果報告書『近世初期讃岐国における城下町建設と開発・治水に関する研究』(総頁 127 頁)を刊行した。本誌には、研究期間に発表した論文 5 編の他、改稿したもの 1 編、前出の古文書解説講座のテキスト、香川大学教養教育科目の e-learning 教材「近世讃岐国における開発と治水の展開」のプリントアウトを収録した。なお、論文については初出時の史料の誤読・誤植を修正した。

(4)全体成果

本研究では、各種の讃岐国絵図および高松城下の絵図、近世の歴史書・地誌類をおもな資料として、近世初期の讃岐国においての、大名による城下町建設、河川の改修、ため池の修復・新造について考察することにより、国土開発がいかに進められたか、について明らかにした。おもな成果は、以下のとおりである。

讃岐国が生駒家の支配下にあった寛永年間(1624~44)と、高松松平藩初代藩主・松平頼重の治世下の万治~寛文年間(1658~73)の 2 期に開発の画期があることを明らかにした。

第 1 期においては、開発は自然との調和をはかりながら進められたが、第 2 期においては乱開発に近い状況がみられること、それが生じた原因を明らかにした。

各種の讃岐国絵図および城下図などの系統と国土開発に関する史料としての有効性を明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

論文

田中健二、生駒時代の讃岐国絵図について、近世初期讃岐国における城下町建設と開発・治水に関する研究、査読無、2017、91 - 93

田中健二、『正保国絵図』に見る近世初期の引田・高松・丸亀、香川大学教育学部研究報告、査読無、部 147 号、2017、33 - 53

田中健二、香川県立ミュージアム所蔵元文 5 年(1740)6 月讃岐国高松地図について、香川大学教育学部研究報告、査読無、部 146 号、2016、1 - 13

田中健二、「讃岐国絵図」に見る「古・坂出湾」の港と浦、坂出市史研究、坂出市史編さん所、査読無、3号、2016、6 - 10
田中健二、香川県立文書館所蔵高松城下図(仮称)の製作年代について、香川県立文書館紀要 査読無、20号 2016、1 - 18
田中健二・御厨義道、小神野与兵衛著『盛衰記』と中村十竹著『消暑漫筆』について、香川大学教育学部研究報告、査読無、部145号、2016、21 - 41

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

田中健二、美巧社、近世讃岐国における開発と治水の展開、2017、127
田中健二、美巧社、彰往考来、2015、159

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 健二 (TANAKA, KENJI)
香川大学・教育学部・名誉教授
研究者番号：30128045

(2) 研究分担者

なし

研究者番号：

(3) 連携研究

なし

研究者番号：

(4) 研究協力者

御厨義道(MIKURIYA, YOSHIMICHI)
香川県立ミュージアム・専門学芸員